

## 座右の銘



## 自分が病気になったときに診てもらいたい医師を目指す

永田 靖 大学院医系科学研究科 医学分野 放射線腫瘍学 教授

私は、「自分が病気になったときに診てもらいたい医師」を目指しています。自分は非常に臆病者ですので、自分が患者になったときの担当医の挙動や言動が非常に気になります。特に治療方針に影響するような画像検査や血液検査の結果説明の時には、なおさら敏感となります。そのため、毎日自分が患者さんを診察するときは、所作や言動には細心の注意をはらいます。患者さんが医師に求めているものは、苦痛や不安の解消や、疑問への回答です。そのため患者さんのどのような質問にも、できうる限りの回答をしています。また検査結果が思わしくなくても、できるだけ前向きに希望を持てるように説明するようにも心がけています。

また患者さんには常々元気になってもらいたいと思って診療しています。そのためには医師である自分が健康である必要があります。自らが病みながら、患者さんを励ます余裕はないからです。日々、自らの心身を鍛錬し、心と体をできるだけ健康に保つことが、もちろん自分のためであり、ひいては患者さんのためと考えています。毎日のジョギングは私の趣味であり、健康保持のための秘訣です。

私が求めている医師像は、その専門領域で常に最先端の情報を収集し、どのような状況においても適切な判断が可能な、「この先生に任せておけば、結果がどうなっても患者さんが納得できる。」医師です。そのためには、これからもまだまだ精進が必要と思っております。



## Only a life lived for others is a life worth living

弓削 類 大学院医系科学研究科 保健学分野 生体環境適応科学 教授

「他人のために生きた人生だけが生きる価値のある人生である」はAlbert Einsteinの遺した言葉です。Einsteinの一点を凝視した神々しい表情のポスターに記したメッセージで、私の人生の中で何度か目にすることがありました。

29歳で金沢大学の故 野村 進教授にお世話になってアメリカとカナダに留学させて頂きました。アルバータ大学では、David Reid教授の勧めで大学の仕事が終わった6時から10時まで毎日のように通っていたVocational Training Centreの教室の壁に貼ってありました。当時、旧ソビエト連邦崩壊でポーランドや旧ユーゴスラビアから多くの難民が発生し、難民の生活は極めて悲惨で厳しいなか、人々が助け合う姿を見つめるようにこのポスターがありました。次に出会ったのはNASAジョンソン宇宙センターのラボの正面に同じポスターが掲げてありました。NASAのプロジェクトでは、世界中の研究者が集い、このポスターは人類への貢献という高い理念を鼓舞する役目を果たしていました。その後も何度か目にしましたがHumanityが問われる現場にこのメッセージがありました。母校となった広島大学では、栗栖名誉教授及び脳神経外科学教室との15年に渡る共同研究がきっかけとなり、頭蓋由来間葉系幹細胞の脳梗塞の再生医療の臨床研究がスタートし、堀江教授に引き継がれ、ロボットリハビリテーションでの回復促進にも取り組んでいます。全国から回復を半ば諦め失意の中にある多くの脳卒中当事者からSNSを通じてお声を頂いています。その声に応えるためにHumanityを持って待たなして取り組むべき社会的課題だと考えています。

ロシアのウクライナ侵攻による破壊と殺戮が、またもや多くの難民を生んでいる現実を見て本当に心が痛みます。世界が見たのは長期独裁が負の連鎖を生むという事実です。一刻も早いウクライナの人々の安全と平和を願いつつ、あの時見たEinsteinのポスターがまた心に思い出されます。